

ツバメ、カモメなどの展望車にて よみあちはいしことありけり

—— 新村出旧蔵柳田国男著作の書入を読む ——

菊 地 暁*

1. は じ め に

重山・新村出。国語学者。1876年山口県山口町（現山口市）生まれ。1967年没。

柳翁・柳田国男。民俗学者。1875年兵庫県辻川村（現福崎町）生まれ。1962年没。

この二人の碩学が終生親交を持ち続けたことは、当人たちが自ら語っているところであり、相応に知られた事柄である¹⁾。だが、その交流の学史的意義が真²⁾に考察されたことは、管見の限り、ない。理由はいろいろ考えられるが、大まかにいえば二つある。

一つは、新村出の学問がこれまで十分に検討されてこなかったこと、すなわち、「国民的辞書」たる『広辞苑』の存在があまりに大きく、それ以外の業績が参照されなくなったためである。新村の学史的検討は、その大半が『広辞苑』をめぐる議論であり²⁾、『東方言語史叢考』（1927 岩波書店）に代表される東アジア言語史研究、『南蛮更紗』（1924 改造社）に代表されるキリシタン研究など、辞書編纂以外の業績に関しては、『新村出全集』全15巻（1971-73）の各巻所収「解説」が要を得た紹介となっていることを除けば、ほとんど未着手といっても過言ではない³⁾。こうした状況が、新村の学問に少なからぬ影響を与えた柳田との交流を看過せしめる一因となっている。

もう一つは、二人の交流を跡付ける具体的資料、とりわけ書簡がこれまで見つからなかったためである。新村については上記の全集が、柳田については『定本柳田国男集』（1962-71）全36巻が刊行されており、所収の著作目録・年譜・索引等から二人の交流をある程度確認できる。にもかかわらず、どういうわけか全集の書簡篇に互いの書簡が未収録であるため、両者の親密な交流が可視化されなかったのである。

* きくち あきら 京都大学人文科学研究所

筆者はいくつかの機関の資料調査から、両者の交流をうかがい知る資料を発見した。すなわち、財団法人新村出記念財団・重山文庫、大阪市立大学学術情報センター・新村文庫、成城大学民俗学研究所・柳田文庫に所蔵される書簡・書籍等である。これらの資料と全集等から得られる情報を総合した結果、二人の知的交流はかなりの程度復元可能となった。その概要は拙稿（印刷中 a）において論じ、また、拙稿（印刷中 b）において書簡を検討しているので、本稿では各文庫所蔵図書の概要を提示し、検討を加えることとしたい。

そこから垣間見える新村と柳田の交流は、同時代の民俗学・国語学周辺を照らし出すはずである。

2 新村旧蔵柳田図書

大阪市立大学・学術情報総合センター（旧附属図書館）・新村文庫には、新村出の旧蔵書 7579 冊が所蔵されている⁴⁾。同文庫は 1949 年、1970 年の 2 回にわたって大阪市立大学が購入したもので、受け入れにあたっては、恒藤恭（法哲学者、当時学長）、谷山茂（国文学者、当時文学部教授）、小島憲之（国文学者、当時文学部教授）の尽力があったという。内容は、2 万冊を超えるという新村蔵書のうち、朝鮮語関係の資料若干を除く、「言語学、国語、国文学関係の文献を中心とした」「主要な蔵書」である。

また、財団法人新村出記念財団・重山文庫にも新村旧蔵柳田著作は所蔵されている⁵⁾。同財団は、「故新村出の手稿及び収集した図書・資料の整理保存及び公開を計るとともに、国語学・言語学の調査研究を促進し、助成してその進歩発展を図り、もって我が国の学術の発展に寄与すること」を目的として、1981 年 5 月 6 日に設立されたもので、手稿、蔵書、書簡等の新村出関係資料が、新村の号「重山」を冠した「重山文庫」として残されており、それらの整理は今も続けられている⁶⁾。

上記の二つの文庫から、柳田著作が含まれる図書（監修、校訂、分担執筆、抜刷等を含む）、および、柳田と新村の交流にまつわる書入等が認められる図書を刊行年順に並べたものが、資料①「新村出旧蔵柳田国男図書一覧」である。総計 107 タイトルあり、うち、57 タイトルに書入等が認められる。順次検討を加えていこう。

これらの図書を眺めてすぐに気づかれるのは、新村が読書の痕跡を残すタイプの読者だという点だ。図書の入手や読了に関する書入に始まり、郵送宛名書や書簡など関連資料の貼込、さらには葉がわりの挟込など⁷⁾、新村の読書体験を伝える情報がさまざまな形で刻み込まれている⁸⁾。これらの情報から、新村と柳田の交流がリアルに浮かび上がってくる。

まず、二人の直接の面会に関わるもの：

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

「大正十一年四月二十一日の夕」「東京一ツ橋見付内如水会の館にて開かれし南島談話会初度の寄合の席上主催者柳田国男氏よりこの書を得」

伊波普猷・真境名安興『琉球之五偉人』（1916 小沢書店）（新）

「昭和四年六月二十一日夕 著者柳田氏を東朝社〔東京朝日新聞社〕に訪ひしをり」

柳田国男『日本伝説集』（1929 アルス）（新）

「昭和八年四月十四日砧村の著者をたづねて此の第一及第二の抜ずりを得たり」

柳田国男「農村語彙」1-2（1933『農業経済研究』9/1-2）（新）

「昭和八年十月一日砧村に柳田氏を訪ひてかへりがけに受領す」

椎橋好『下野民謡採集』（1933 郷土採集れだくてえよ）（新）

「きのふ〔昭和九年五月二十二日〕あさ大学に出がけに之を承りし 大学にて柳田氏にあひ此の本の題簽の話などもで」

金田一京助『北の人』（1934 梓書房）（新）

「昭和九年七月十四日」「砧村におとづれしとき柳田氏の書齋にありし一冊をもらい受け」

信濃教育會北安曇部會編『北安曇郡郷土誌稿 5 民謡童言葉篇』（1933 郷土研究社）（新）

「昭和十二年二月二十七日 砧村の柳田氏を訪ひしをりにおくられたり」

木曾教育部会『木曾民謡集』（1936 信濃毎日新聞）（新）

「昭和十六年紀元節の午後著者を尋ねし折 内室の手かみありし一冊を取寄せて贈らる」

柳田国男『豆の葉と太陽』（1941 創元選書）（重）

「〔昭和二十六年〕十月二十五日柳翁のおとづれにあひて相語ること多時、懐旧の情つきず、喜寿をことほぎ 受勲を慶び、二十七日二十八日その余韻なほつゞく」

柳田国男著・柳田国男先生喜寿記念会編『後狩詞記』（1951 実業之日本社）（新）

新村が柳田邸を訪問した際の寄贈が目立つ。興味深いのは、自著のみならず、国語研究に関連する他の著者の書物も贈っていることで、新村に研究協力を期待していることがうかがえる。また、晩年は互いに上京・上洛を控えたため、直接の授受がほとんどなかったことも確認できる。なお、金田一『北の人』書入に「大学にて柳田氏にあひ」とあるのは、1934年5月22日から26日まで、柳田が京大文学部神道史講座（京都府神職会の寄付講座）での集中講義のため、京都に滞在していたからである。

次に、直接の面会に依らない郵送の寄贈について。

柳田国男『海南小記』（1925 大岡山書店）（新）「新村大人請評 大正十四年五月 柳田国男」

柳田国男「風位考資料」（1930『愛媛県周桑郡共同研究彙報』2）（新）「昭和五年八月受」

柳田国男『明治大正史世相篇』（1931 朝日新聞社）（重）「旧作ながらも絶版に近し 御保存

を乞う 一六、一、一五 柳田国男」

柳田国男「鍋墨と黛と入墨」(1931『信濃教育』534(抜刷))(新)「昭和六年四月十一日受」

柳田国男「厄介及び居候」(1931『社会経済史学』1/2(抜刷))(新)「昭和六年八月十八日接手」

柳田国男『山村語彙』(1932大日本山林会)(新)「昭和七年十二月二十九日受」

柳田国男『地名の話その他』(1933岡書院)(新)「昭和八年一月廿八日受領」

柳田国男『産育習俗語彙』(1935恩賜財団愛育会)(重)「著者郵贈 昭和十年十月」

柳田国男『地名の研究』(1936古今書院)(重)「新村大人御文庫 昭和十一年一月十六日 柳田国男上」

柳田国男『孤猿随筆』(1939創元社)(重)「昭和十四年十二月受領 著者寄贈」

岩倉市郎『沖永楽部昔話』(1940民間伝承の会)(新)「昭和十五年三月十二日 柳田氏寄贈」

柳田国男編・岩倉市郎著『全国方言集 喜界島方言集』(1941中央公論社)(新)「昭和十六年九月八日接手」

柳田国男『小さき者の声』(1942三国書房)(新)「昭和十七年十二月廿三日受領 著者より寄贈」

柳田国男『笑の本願』(1946養徳社)(新)「昭和二十一年(一九四六)四月十四日あさ受領」

柳田国男『毎日の言葉』(1946創元社)(新)「昭和二十一年七月受」

柳田国男『北国紀行』(1948実業之日本社)(新)「昭和二十四年三月二十一日春分の日のあさ受領す」

柳田国男『母の手毬歌』(1949芝書店)(重)「昭和二十六年十二月十九日到来 著者寄贈 新村出」

柳田国男『島の人生』(1951創元社)(新)「昭和二十六年一月十六日柳翁郵贈 出」

柳田国男著・柳田国男先生喜寿記念会編『後狩詞記』(1951実業之日本社)(新)「昭和二十六年十月二十日受」

柳田国男『不幸なる芸術』(1953筑摩書房)(新)「昭和二十八年六月二十一日 梅雨霽れし日 曜日の正午受」

にひなめ研究会編『新嘗の研究』(1953創元社)(重)「昭和二十八年十二月五日受 柳田国男 翁郵贈」

柳田国男『故郷七十年』(1959のじぎく文庫)(新)「重山先生請評 昭和三十四年十二月 柳田」
「昭和三十四年己亥十二月十一日夕受」

このほか、柳田国男『民間伝承論』(1934共立社)(新)は柳田からではなく口述筆記を担当した後藤興善から、柳田国男編・野村伝四著『全国方言集 大隈肝属郡方言集』(1942中央公論

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

社）（新）は著者の野村伝四から、それぞれ寄贈されている。

このうち興味深いのは、『明治大正史世相編』で、刊行から十年遅れの1941年の寄贈だが、それは新村の質問に対して書簡にかえて著書によって回答したためである。表紙見開には新村により「著者、五四頁、六〇頁、七三頁の欄外ニ〇符ヲ標シテ予ノ問ニ答フ」と書かれており、54頁10行目、「握り鮓」「握り飯」に触れた行の頭、および、73頁9行目の「握り飯」「ヤキメシ」に触れた行の頭に柳田筆の「〇」が付されている。それぞれの語は新村の手と思われる色鉛筆で丸く囲まれ、あるいは傍点が打たれている。おそらく、新村がメシについて質問し、柳田がそれに答えたのだろう。なお、60頁14行目の行頭に付された「〇」は、「是は新村博士の領分になるが、関西のどぶ漬、東国でいう糠味噌のことを、以前は何故かヂンダと呼んで居た」という新村への言及箇所を示したものと思われる。

ところで、意外に目に付くのは新村自らの購入によるものである。

[1940年12月25日付書簡]「野鳥雑記本屋の怠りにてまだ差上げぬうち御求被下恐入候」

柳田国男『野鳥雑記』（1940 甲鳥書林）（重）

「昨夜東京よりの友春雨を冒して来り此の本を河原町の朝日ビルにてみかけりといひしをきゝけさ深草までゆくをり立寄りて之を求め藤ノ森までの電車の中にてよみはじめぬ 昭和十七年三月三十日 春風暖けき日なり」

柳田国男『こども風土記』（1942 朝日新聞社）（重）

[1943年6月24日以降の書簡]「それなら強ひてもさし上げれハよかつたにと存候」

柳田国男『木思石語』（1942 三元社）（新）

「昭和十九年十一月四日夕ぐれ 烏丸鞍馬口の清水書房にて求めつ この日東山の坂内氏邸に訪書の砌 案内の今井正雄氏の示されしをみてなり 重山寒人 燈火すでに親しむべき時にして火鉢ハ未だ出されず たそがれに近く志ぐれ日和なれども電燈をなほ点せず 老眼を嘆じ 老寒を耐ふ 十一月五日」

柳田国男『火の昔』（1944 実業之日本社）（重）

「昭和二十三年七月十八日購入」

柳田国男『西は何方』（1948 甲文社）（新）

戦時中の購入が目立つのは、経済統制のあおりで出版や郵送がままならず、またそれゆえに書物の入手が格別に感慨深かったためだろうか。このほか、入手経緯の書入がないものは献本ではないと推測されるので、購入本はさらに多いと予想される。

これらの図書の書入を眺める、新村の移動・旅行にまつわるものが目立つ。主なものを掲げる。

「昭和二年十月二十四日青島に対する海村に一泊し翌朝びろうの島を初めて一見す 帰路は本書のあちこち再読すれば興さらに深かり」

柳田国男『海南小記』（1925 大岡山書店）（新）

「七月十一日上京のをり之を手にし西帰の車中にてよみはづしを 八月二日再び帰洛のをり一読了りぬ 昭和五年其日」

柳田国男『蝸牛考』（1930 刀江書院）（重）

「昭和七年十一月十日小春日和のうらかなり 梓書房を訪ひて此書を得 その夜客舎によむ 新村出 十三日しぐれのみのじに序よりよみつゞけぬ」

柳田国男『秋風帖』（1932 梓書房）（新）

「昭和十四年九月二十六日東北の旅よりのかるさ 東京神田にて求め翌日京都へ戻る途中よむ 新村出」

柳田国男『国語の将来』（1939 創元選書）（重）

「昭和十八年六月二十四日 東京よりのかへりちによむ」

柳田国男『木思石語』（1942 三元社）（新）

「愛孫日記、十七年九月廿九日条 婦人公論に連載せられしを、上り下りのツバメ、カモメなどの展望車の書架上よりとりだして安らかによみあぢはいしことありけり。著者に語りて、一冊にまとめて出版せられなば御寄贈を受け（た）しといひしことありければ、忘れで郵送あり」

柳田国男『毎日の言葉』（1946 創元社）（新）

このうち、『国語の将来』に書きつけられた「東北の旅」については、『新村出全集索引』（1983）所収年譜の1939年9月25日条に「初めて生前の郷土山形を訪う」とあるのを指す。「生前の郷土」とは、父・関口隆吉の山形県令在任中に母が出を懐妊したためで、父の次の任地・山形県において誕生した新村は山形と山形の山を重ねて「出」と命名され、それに因んで自からの号を「重山」としている。

また、これらの図書¹⁰の書入から、新村から柳田に贈られた書簡について類推することができる。たとえば、『毎日の言葉』には、柳田の枢密院顧問官就任（1946年7月12日）を祝した次の二首（三首？）が書き付けられている。二人の友情と信頼がよく表れた歌だろう。

文字のみち 言葉のみちの 大本も 君に委ねば 心安けむ
よのつねの ことばの道も わけいれば 奥がは深し 花も咲きけり

50通あまりの新村宛柳田書簡が残されていたことから類推すると、それと同程度もしくはそ

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

れ以上の書簡が柳田の元に残っていて不思議はないのだが、今のところ、重山文庫にコピーの残された一点を除いてその所在は不明である。この点からも、新村旧蔵所の書入は貴重な資料といえるだろう。

3 柳田旧蔵新村図書

柳田国男の旧蔵書は成城大学民俗学研究所・柳田文庫⁹⁾、慶應義塾大学言語文化研究所・柳田文庫¹⁰⁾、全国農業協同組合中央会・協同組合図書資料センター蔵「帝国農会寄贈図書」¹¹⁾、飯田市立美術博物館・柳田国男館蔵図書に分蔵されており¹²⁾、ここでは新村出著作の主要部分を所蔵する成城大柳田文庫を中心に検討する。

成城大柳田文庫には柳田旧蔵所2万冊あまりが収められている。1957年3月、財団法人民俗学研究所の解散にともない同研究所に寄付されていた蔵書が柳田に返還され、その公開利用の道を模索した柳田が成城大学図書館に寄託、1962年、柳田の遺言により寄贈され、これが柳田文庫となっている。同文庫をベースに同年に「柳田文庫・民俗学研究室」が発足、1973年、発展的改組の結果、民俗学研究所となる。

柳田文庫所蔵の新村図書（編著、校訂、分担執筆、抜刷等を含む）は41タイトル（抜刷を含む）、新村の書入等のあるものが7点、柳田の書入等のあるものが10点、両方があるものが3点である（資料②）。順次検討してみよう。

まず、新村から寄贈されたもの。新村宛柳田書簡から寄贈を確認できるものは書簡の年月日を加えた。

新村出『南蛮更紗』（1924 改造社）「謹呈 柳田学兄 著者」（1924年12月19日付）

新村出『南蛮廣記』（1925 岩波書店）「謹呈」付箋（1925年9月18日付）

新村出『東方言語史叢考』（1927 岩波書店）「著者謹呈」付箋（1928年1月21日付）

新村出『薩道先生景仰録』（1929 ぐろりあ・そさえて）「贈呈」付箋（1929年11月17日付）

新村出「杉原紙源流考 上」（1940『和紙研究』7）「柳田学兄叱正 昭和15年十二月 新村出」（1940年12月25日付）

新村出『国語問題正義』（1941 白水社）「謹呈」付箋

新村出『語源をさぐる 1』（1951 岡書院）（1951年4月20日付）

なお、次の3点は柳田書簡から寄贈を確認できるものの、柳田文庫に所蔵されないものである。

新村『櫃』（1940 靖文社）（1941年1月4日付）

新村出『童心録』(1946 靖文社) (1947 年 4 月 6 日付)

新村出『(歌集) 牡丹の園』(1952 白楊社) (1952 年 7 月 6 日付)

「読了」を示す書入のあるものは 5 点：

「昭和五年八月八日了」

新村出『琅玕記』(1930 改造社)

「十一年後ニ一読シヲハル 昭和十九年十一月二十一日 柳田国男」

国語学講習会編『国語学講習録』(1934 岡書院)

「昭和十年四月二十日了」

新村出『国語系統論』(1935 明治書院)

「此年三月一一日了 もう一度よまうと思ふ 柳田国男」

新村出『国語問題正義』(1941 白水社)

「昭和二十六年四月二十日了 柳田国男 二三異見アリ 後日話題トスヘシ コノ書誤字多シ 筆記者人ヲ得ストイフヘシ」

新村出『語源をさぐる 1』(1951 岡書院)

このうち、興味深いのは国語学講習会編『国語学講習録』である。前年 7 月 26 - 29 日、信州松本で実施された「国語学講習会」の記録で、新村出「規範的対歴史的日本文典」、「日本辞書の現実と理想」のほか、柳田国男「国語史論」、小倉進平「国語学における朝鮮語の問題」、金田一京助「国語学におけるアイヌ語の問題」が講義されている。この講習会を企画した岡茂雄(岡書院社主)によれば、岡が新村に懇願してスタートした辞典編纂事業が、新村の理想とはほど遠いものとなりつつあったため、新村の「理想の辞書」観を公にする必要を岡が感じたからだったという(岡 1974)¹³⁾。

この講演で新村は、「此の意味で柳田さんの話は、今更乍ら私共に善い刺激であつた」(新全 2 : 265) と述べ、国語研究における柳田の貢献を高く評価している。

一方、柳田にとっても新村の論は共感に値するものだった。柳田文庫蔵本 80 頁には、新村「規範的対歴史的日本文典」の「第八 文法の項目」という節タイトルの上に「○」が書き入れられ、その一行目の「第二に造語論」に傍線が引かれている¹⁴⁾。柳田は、言葉が作り出される仕組みを踏まえないことには、標準語を強制したところですぐに再分化(=方言化)が起こると注意し、『国語史 新語篇』(1936 刀江書院)などの著作で、語の生成と改廃のダイナミズムに多大な関心を注いできた。同様に「造語」に関心を抱く新村に我が意を得たりの思いだったのだろう。

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

また、新村「日本辞書の現実と理想」の「第二 語の選択」（102頁）には次の傍点線が引かれている。

又、地方語の中にも、私共の規範観念、或は審美主義から見て、此の地方の言葉は辞書の中に採集しても可いのではなからうかと考へられる様なものもある。辞書の編纂者が言語の作◎者に成つては僭越であるが、詩や文章の創作者や社会へ薦めて、文章語にして行はせ度いと云ふ様なものもある。さうした言葉は全国に行はせたら何うであらう。でなくて放つて置くならば、或は実用的には成るかも知れないが、美を失つて了ふに違ひない。とにかく、国語を富ませるに役立つ様な言葉を、地方語の庫から出し、間接な辞書又直接な辞書に採る事も試みて可いと思ふ。

柳田が◎を付することは相当に珍しいことである。これも、方言を標準語に敵対するものではなく、標準語を発展させるための存在／素材とする認識において両者が一致したが故だろう。

ところで、「馬鹿」の語源説をめぐる議論は新村と柳田の間に闘わされた唯一の論争といつて良いのだが¹⁵⁾、その痕跡はなぜか柳田文庫からは見いだしがたい。「馬鹿」の語源を漢訳仏典中の「莫迦」が僧侶の間から流布したとする「馬鹿考」（1930）を収めた新村『日本の言葉』（1940 創元社）が刊行されると、柳田は「提灯もち」と謙遜しつつ（1940年12月25日付書簡）、版元・創元社のPR誌『創元』に書評を寄稿、ワ行音からバ行音への転訛の例を指摘しつつ、バカの語源をヲコとする自説を展開する。ところが、渦中の書である『日本の言葉』の柳田文庫蔵本を見ても書入の類を見いだすことはできない。

この後、1941年2月20日付書簡に、「若」の御説ハ甘受いたしかね候 御歴代の御譜も久しく此語を使ひしことも御考被成必要可有候」とあり、新村と柳田の間で何らかの応酬があったことがうかがえる¹⁶⁾。

ところが、『外来語の話』（1944 新日本図書）において、新村は唐突に「バカといふ言葉も梵語から出たといふ説があるが、之は私の小論文「馬鹿考」に於て否定し去つたから、こゝでは触れない」と言い放つ（新全3：55）。「馬鹿考」は漢訳仏典中の梵語に馬鹿のオリジンを指定していたはずなので、なんとも不可解な一節である。

一方の柳田も同様に不可解だ。「鳴澁の文学」（1947）において「馬鹿」を取り上げ、「私の老友新村博士は、夙く此点に就いて思ひを潜められた一人である。さうしてこのバカという新語の原型を、年少青春を意味するワカ（若）という語ではないかとの説を、『日本の言葉』と題する文集に発表して居られる」と述べているのだが（柳全19：672-673）、バカをワカに関連づける視点はワ行からバ行への転化を指摘する柳田説の延長上にあり、しかも『日本の言葉』は年少青春を意味するワカには一切言及していない。自説が新村説として誤って記憶されてい

るのだ。

先の書評と「鳴瀝の文学」が収録された『不幸なる芸術』（1953 筑摩書房）は大阪市大新村文庫に所蔵されている。その目次には「拙考の批判あり」、中表紙には「梅雨霽れし日曜日の正午受 さゝゆりの 香こもる 小山居の 東斎裡に 莫迦凡人」と書入があり、柳田の批判を気にしている様子がうかがえる¹⁷⁾。そして新村は『語源をさぐる 1』（1951 岡書院）の「序」において反論を展開する。

この馬鹿という語源は徳川時代に出た説に従って仏教界で使はれた莫訶といふ梵語が仏教の僧侶に用ひられて、それから寺院以外に普通の俗界に追ひ出されて行つたといふ語源説があるが、私はこの方を採用した。外来語源説、詳しくいふならば梵語語源説を私の友人の柳田国男君が批難して、これは日本の純然たる俗語である。即ち日本のヲコといふ国語から来たといふ反対論を唱へ、私も再考したがその異論に絶対服従したわけではなく、仮りに国語語源説を採るとしてもヲコ以外の語源説が考へられさうに思へてならない。（新全4：231）

自らを「梵語語源説」、柳田を「国語語源説」と位置づけ、柳田説に決して同意していない。この『語源をさぐる 1』も柳田文庫に所蔵されており、多数の書入を確認できる。だが、多くの「？」を書き込んで疑義を呈しているにもかかわらず、柳田説への留保を述べた「序」への書入は見られない。新村の不同意を柳田がどう受け止めたかは謎である。同書奥付前頁に「昭和二十六年四月二十日了 柳田国男 二三異見アリ 後日話題トスヘシ」とあり、実際に語源談義を申し込んでいるところから（1951年4月20日付書簡）、見解を異にしつつも、柳田が新村の学識を信頼し、論敵として尊重していることがわかる。

「馬鹿」な話はもう止そう、ということなのだろう。

4 お わ り に

以上、重山文庫、新村文庫、柳田文庫所蔵図書から、新村出と柳田国男の交流を跡づけてみた。もとよりこれらの図書は両者の交流の一端を示すに過ぎず、著作や書簡との照合、さらには二人を取り囲む同時代状況との対照が必要なことは言を俟たない。蔵書の総体的把握という作業も、とりわけ新村や柳田のようにユニークな書込をするタイプの人物を理解するためには、留意すべき課題だろう。難題山積道尚遠しの感が深まるばかりだが、二三気づいた点を指摘して稿を閉じることとしたい。

一高以来の70年余りにわたる二人の交流は、結局のところ「くされ縁」というのが最も似つかわしいように思われる。そしてその前提として、言葉に対するスタンスの基本的な一致、す

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

なわち、①生ける「ことば」の客観的把握、②「ことば」の収集への執着、③「ことば」の進歩への楽観、という三点の共通理解があることを見落としてはならない（拙稿：印刷中a）。書斎派の新村と現場派の柳田という対比は、実は表層的なものに過ぎないのだ。

そして、さらに重要なのは、こうした二人の信頼関係が媒介となって、京大周辺の研究者と柳田民俗学との交流が促進されたこと、柳田民俗学にとって新村が京大へのアクセスポイントとなっていたことである（拙稿：印刷中b）。柳田の民俗学が京大^{△△△}国史学教授・西田直二郎の〈文化史学〉と共鳴し、西田の門下から民俗学を積極的に取り込んだユニークな史風が展開していくのは、京大民俗学会の活動が始まる昭和初期のこととなるのだが（拙稿2008, 2009）、そのような学問的融合が醸成される知的環境の一つとして、新村と柳田の交流が存在したのである。

最後に、本稿の主題からはやや逸れるが、新村旧蔵書の一部を紹介しておきたい。

『言語学雑誌』（1900. 2-1902. 9）という雑誌がある。新村が「先輩および同輩と共に創立したところの言語学会」（新全14：301）の刊行で、わずか三年足らずで潰れたものの、上田万年門下の少壮気鋭の言語学徒たちが「言語学」樹立のために熱心に執筆・編集し、新村も「私の処女論文と言ってもいい」（新全14：301）「ヤコブ・グリム」（新全1）などの力作を寄せている。同誌「雑纂」は、言語学および周辺分野の近況を伝える無署名記事だが、重山文庫所蔵『言語学雑誌』を紐解くと新村の書込によりその執筆者が判明する。編集員の藤岡勝二、保科孝一、八杉貞利なども加わるが、その過半は新村の筆になるものなのだ。これらはいずれも全集未収録のものだが、後年は温厚篤実で知られた新村の意気盛んな若き日がしのばれる興味深い文章である。たとえば、「文科大学博言学科の改称」（1900『言語学雑誌』1/9）。

名実かなはず、久しく世人の誤解を招いた文科大学の^{△△△}博言学科の称も、本年三月二十九日勅令第八十七号を以て、いよいよ四月一日から^{△△△}言語学科といふ名に改められた。これでむかし故西周氏が作った博言学といふ訳名も全く学界から放逐することができたのは誠に喜ばしいことである。（傍点原文）

このように、新村旧蔵書には近代日本文学の舞台裏をうかがう好資料がそこここに散らばっている。蔵書という分厚いテキストを重層的に読み解くことが、新たな方法論を要請する新たな知的フロンティアとなることを確認して、本稿の作業はひとまず終える。

付記 本稿執筆にあたっては、財団法人新村出記念財団・重山文庫、大阪市立大学学術情報センター・新村文庫、成城大学民俗学研究所・柳田文庫で資料調査の便宜を得た。とりわけ新村出記念財団では、同財団理事長の堀井令以知氏、理事で新村出令孫の新村祐一郎氏、評議員の吉

野政治氏、職員の入江貞子氏から多岐にわたるご教示を頂いた。また、書込の難読箇所については岩城卓二氏、黒岩康博氏のご助力を仰いだ。記して感謝する。

注

- 1) 伝記事項は特に断りのない限り新村出記念財団編『新村出全集索引』(1983)、柳田国男研究会編『柳田国男伝』(1988)所収年譜に依る。また、『新村出全集』『定本柳田国男集』『柳田国男全集』からの引用は巻数と頁数のみ表記、重山文庫・新村文庫所蔵の新村出宛柳田国男書簡からの引用は発信の日付のみ表記する。書簡の全文は拙稿(印刷中b)に掲載する予定である。
- 2) ところが、その『広辞苑』ですら編者・新村にどの程度関与があるのか、はっきりしない部分がある(安田 2006)。
- 3) 新村のキリシタン研究については、近年、高木(2005)、日高(2005)などが発表されている。
- 4) 同文庫については大阪市立大学附属図書館編(1978)に依る。
- 5) 同財団に関しては記念文集編集委員会編(2006)による。
- 6) 新村出記念財団編(1996)(1998)(2006)参照。なお、柳田の著作は新村文庫、重山文庫の両者に分かれており、分野や時期で区分されているわけでもない。
- 7) 柳田国男『俳諧講釈』(1947 民共社)(新)に挟み込まれた年賀状の差出人・西尾銈次郎は、おそらく同書とは関係なく単なる葉代わりだろう。なお、重山文庫の新村旧蔵書には書簡等が大量に挟み込まれていたといい、現在では全て取り出されている。
- 8) とはいえ、「けふ東上の途中、殆ど全部を読了し感興極りなし」という読後感の記された金田一京助『北の人』(1934 梓書房)(新)には本文中の書入が一切ない。書入の有無から既読未読を必ずしも判別できるわけではないことは注意を要する
- 9) 同文庫に関しては成城大学(1967)による。
- 10) 慶應義塾大学言語文化研究所・柳田文庫は1944年に柳田が同研究所に寄贈した方言カード、ノート、書籍、雑誌、抜刷等であり、詳細は西村亨編『柳田国男方言文庫目録』(1964)としてまとめられている。これを見る限り、新村関係資料は、柳田「何の為に方言を集めるか」、新村「方言研究の目的」の二論文を収めた國學院大學方言研究会編『方言誌 第七輯』(1933)のみである。
- 11) 「帝国農会寄贈図書」は、柳田が1920年に帝国農会に寄贈した400冊弱の図書で、現在は全国農業協同組合中央会・協同組合図書資料センターに所蔵されている。高橋治(2008)所収の目録を見る限り、新村関係資料は含まれない。
- 12) 飯田市立美術博物館・柳田国男館蔵図書は成城にあった柳田旧邸が義父・直平の故地・飯田に移築された際に一緒に寄贈されたもので、成城大柳田文庫への寄贈以降も柳田の手元に置かれた図書である。目録未公刊のため、新村関係図書の有無は今後の調査課題である。
- 13) 紆余曲折の末、『辞苑』(1935 博文館)として刊行され、戦中・戦後の増補改訂を経て『広辞苑』(1955 岩波書店)となる。
- 14) 柳田の書入は、一定の留保は必要なものの、▽はカードに採るべきもの、△は問題点のあるもの、×は間違い、○は賛成すべき説であるといわれている(牧田茂 1972)。
- 15) 松本修(1993)に双方の記憶違いを交えた奇妙な論争の展開がトレースされている
- 16) ワカはワ行音からバ行音をへの転訛を想定する際、ヲコ→ワカ→バカという具合にヲコとバカ

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

をつなぐ言葉となる。

- 17) 「莫迦凡人」は vagabond（放浪者）を掛けているのでは、という森洋介氏のご教示を得た。
記して感謝する。

文 献

- 大阪市立大学付属図書館編・発行 1978『新村文庫目録』
- 岡茂雄 1974『本屋風情』平凡社
- 菊地暁 2008「京大国史の「民俗学」時代——西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力——」丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版
- 菊地暁 2009「敵の敵は味方か？——京大史学科と柳田民俗学——」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房
- 菊地暁 印刷中 a「〈ことばの聖〉二人——新村出と柳田国男——」横山俊夫編『言語力の諸相』ミネルヴァ書房
- 菊地暁 印刷中 b「拝啓 新村出様——新村出宛柳田国男書簡からみる民俗学史断章——」『国立歴史民俗博物館研究報告』（号数未定）
- 記念文集編集委員会編 2006『泰山木 財団法人新村出記念財団設立二十五周年記念文集』新村出記念財団
- 新村出 1971-73『新村出全集』全 15 巻，筑摩書房
- 新村出記念財団編 1983『新村出全集索引』筑摩書房
- 新村出記念財団編・発行 1996『新村出博士宛発信者名簿（未定稿）』
- 新村出記念財団編・発行 1998『重山文庫目録Ⅱ』
- 新村出記念財団編・発行 2006『重山文庫雑誌目録』
- 成城大学編・発行 1967『柳田文庫蔵書目録』
- 高木博志 2005「茨城キリシタン遺物の発見」『新修茨木市史年報』4
- 高橋治 2008「柳田国男の帝国農会寄贈図書——調査報告並びに若干の考察——」『民俗学研究』32
- 西村亨編 1964『柳田国男方言文庫』慶應義塾大学言語文化研究所
- 日高由貴 2005「「キリシタン」をめぐる記述——新村出と名づけえぬもの——」『日本学報』24
- 牧田茂 1972『柳田国男』中公新書
- 松本修 1993『全国アホ・バカ分布考——はるかなる言葉の旅路——』太田出版
- 安田敏明 2006『辞書の政治学』平凡社
- 柳田国男 1962-71『定本柳田国男集』全 36 巻，筑摩書房
- 柳田国男 1997-刊行中『柳田国男全集』全 36 巻，筑摩書房
- 柳田国男研究会編 1988『柳田国男伝』三一書房

資料①：新村出旧蔵柳田国男図書一覧

*これは大阪市立大学学術情報総合センター新村文庫および新村出記念財団重山文庫に所蔵された新村出旧蔵図書のうち、柳田国男著作（監修、校訂、編著、分担執筆、抜刷等を含む）および柳田に関連する図書（柳田による寄贈等）の一覧である。

*著者名、刊行年、著作名、発行者（雑誌抜刷等の場合は誌名および巻号）、分類番号、特記事項（書入、貼込・挟込の有無等）の順で表記した。

*書入内容は署名、日時、文章のみ採録し、傍点線、単語等は概要の提示にとどめた。

*判読困難な部分は■とした。

*注記は〔 〕で記した。

1. 柳田国男 1914.07『山島民譚集（一）』甲寅叢書（新 388. 1 YAN）
扉印刷「初版五百部ノ内第 八七 号」〔八七のみ書入〕、他に書入なし
2. 伊波普猷・真境名安興 1916.07『琉球之五偉人』小沢書店（新 312. 1 IBA）
扉に伊波筆「呈新村先生 伊波生」、裏表紙見返しに新村筆「大正十一年四月二十一日の夕、東京一ツ橋見付内如水会の館にて開かれし南島談話会初度の寄合の席上主催者柳田国男氏よりこの書を得、同二十四日朝、帰洛の車中にて一読しおはる、かの夕会合したもの、上田万〔年〕、白鳥庫〔吉〕、幣原坦、三浦新七、本山桂〔川〕、波多野承〔五郎〕、金田一京〔助〕、荻野仲〔三郎〕、東恩納〔寛惇〕、喜捨場永〔珣〕、岩崎卓〔爾〕、折口信〔夫〕、渋谷〔敬三〕、その他なほ数人ありしも名を逸しぬ 新村出識」
3. 柳田国男 1920.02『神を助けた話』玄文社（新 388. 1 YAN）書入なし
4. 柳田国男編 1922.03『郷土誌論』郷土研究社（新 290. 1 YAN）書入なし
5. 柳田国男編 1924.11『炬燵叢書改題』郷土研究社（新 380. 3 YAN）書入なし（重 081）書入なし
6. 柳田国男編 1925.04『郷土会記録』大岡山書店（新 380. 6 YAN）書入なし
7. 柳田国男 1925.04『海南小記』大岡山書店（新 291.99 YAN）
表紙見返しに柳田筆「新村大人請評 大正十四年五月 柳田国男」、扉に新村筆「昭和二年十月二十四日青島に対する海村に一泊し翌朝びろうの島を初めて一見す 帰路は本書のあちこち再読すれば興さらに深かり 新村出」、P 379（「阿遅摩佐の島」の末尾）に新村筆「昭和二年十月二十四日鹿児島より帰りちに青島の対岸なる同じ名の海村に一泊し翌朝島を一周して去りぬ、家へかへりし後、この章を再読して興いと深し 新村出識」。他に書入なし
8. 柳田国男 1925.12『南島研究の現状』『啓明会第十五回講演集』啓明会（新 041 KEI）書入なし
9. 柳田国男 1927.01『民謡の今と昔』『日本文学講座 3』新潮社（新 918 NIP）書入なし
10. 柳田国男 1928.02『雪国の春』岡書院（新 914. 6 YAN）
扉に新村筆「昭和三年二月 新村出」。他に書入なし。
11. 柳田国男 1928.04『昔話解説』『日本文学講座 16』新潮社（新 918 NIP）書入なし
12. 柳田国男 1929.05『日本伝説集』アルス（新 388. 1 YAN）
表紙見返しに新村筆「昭和四年六月二十一日夕 著者柳田氏を東朝社〔東京朝日新聞社〕に訪ひしをりこのぬきずり（別ずり）を贈られし也 新村出」、他に書入なし
13. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1929.08『来目路の橋 真澄遊覧記』真澄遊覧記刊行会（新 915. 5 SUG）書入なし
14. 柳田国男 1929.10『婿入考』大塚史学会編『三宅博士古希祝賀記念論文集』岡書院（新 041 OTS）書入なし

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

15. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1929. 11『伊那の中路 真澄遊覧記』真澄遊覧記刊行会（新 915. 5 SUG）
書入なし
16. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1929. 11『わがこゝろ 真澄遊覧記』真澄遊覧記刊行会（新 915. 5 SUG）
書入なし
17. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1930. 02『奥の手ぶり 真澄遊覧記』真澄遊覧記刊行会（新 915. 5 SUG）
書入なし
18. 柳田国男「東北と郷土研究」1930. 06 日本放送協会東北支部『東北の土俗』三元社（新 382 NIP）
扉に新村筆「新村出」、他に書入なし
19. 柳田国男 1930. 07『蝸牛考』刀江書院（重 818）
外箱：新村筆「（一九三〇）昭和五年七月刊 新村出」、扉に新村筆「七月十一日上京のをり之を手にし
西帰の車中にてよみはづしを 八月二日再び帰洛のをり一読了りぬ 昭和五年其日 新村出」「昭和九
年四月十四日更に詳読す 新村出」、傍点線等若干。
新村出 1933『言語学概論』（新全 2：14），1935『蝸牛礼賛』（新全 11：531-532），1963「京言葉概
観」（新全 2：428）に言及あり
20. 柳田国男 1930. 08「風位考資料」『愛媛県周桑郡共同研究彙報』2（新 818 YAN）
表紙に新村筆「昭和五年八月受 新村出」、他に書入なし，メモ書きの原稿用紙挟込。
21. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1930. 09『ひなの一ふし』郷土研究社（新 388. 9 SUG）書入なし
22. 柳田国男校訂・菅江真澄著 1930. 09『庵の春秋 真澄遊覧』真澄遊覧記刊行会（新 915. 5 SUG）書入
なし
23. 柳田国男 1931. 01『明治大正史世相篇』朝日新聞社（重 210. 6）
表紙見返しに柳田筆「旧作ながらもう絶版に近し 御保存を乞う 一六、一、一五 柳田国男」、新村
筆「著者、五四頁、六〇頁、七三頁の欄外ニ〇符ヲ標シテ予ノ問ニ答フ 昭和十六年正月十八日 新村
出識」、宛名書貼込，P 54 L 10 行頭に柳田筆「〇」，同じ行の「握り鮎」「握り飯」に新村筆「〇」，P 60
L 14 行頭に柳田筆「〇」，P 73 L 9 行頭に柳田筆「〇」，同じ行の「握り飯」に新村筆「〇」，「ヤキメ
ン」に新村筆傍点
24. 柳田国男 1931. 04「鍋墨と黛と入墨」『信濃教育』534（抜刷）（新 818 YAN）
表紙に新村筆「はくろ [三文字朱筆]（昭和六年 月）昭和六年四月十一日受 新村出」，他に書入な
し
25. 柳田国男 1931. 07「厄介及び居候」『社会経済史研究』1/2（抜刷）（新 611. 9 YAN）
抜刷表紙に新村筆「柳田国男 厄介及び居候 『社会経済史研究』一卷二号（年四回）昭和六年七月
号？ 昭和六年八月十八日接手 新村出」，表紙見返し右端に新村筆の関連文献メモ，柳田ハガキ添付
（昭和 6 年 8 月 20 日付），誤字訂正の書入あり。
新村出 1933『言語学概論』（新全 2：60），1934「日本的辞書の現実と理想」（新全 2：288）に言及あ
り
26. 新村出・柳田国男・吉村冬彦・斎藤茂吉 1931. 08『現代日本文学全集 58』改造社（重 090）書入な
し
新村出 1946「随筆の名義」（新全 13：51），1953「茂吉大人を偲ぶ」（新全 14：528）に言及あり
27. 柳田国男 1932. 04『岩波講座日本文学 口承文芸大意』岩波書店（新 918 IWA）書入なし
28. 柳田国男 1932. 11『秋風帖』梓書房（新 291. 09 YAN）
扉に新村筆「昭和七年十一月十日小春日和のうらかなり 梓書房を訪ひて此書を得 その夜客舎によ
む 新村出 十三日しぐれのみのじに序よりよみつゞけぬ 昭和二十年十一月十九日ふと此本を見出し

- より木曾路五個荘の旅日記などひろひよみにす 小山居老史 しくれびより もうすくらき 午後に」
目次に書入あり。挟み込まれた柳田の写真の裏に新村筆「喜寿の柳田国男翁 昭和二十六年 1951 十月
二十日 丹波市にてうつされしもの」。佐々木彦一郎の新聞書評切抜きも挟込。
- 新村出 1933 「橡の樹の歌」(新全 12: 345), 1933 「七葉樹」(新全 11: 433), 1934 「黒つぐみ日記」
(新全 11: 471) に言及あり
29. 柳田国男 1932. 12 『山村語彙』大日本山林会 (新 818 YAN)
表紙に新村筆「昭和七年十二月二十九日受 新村出」, 表紙見返しに封書宛名書貼込。傍点線若干。
30. 柳田国男 1932. 12 『女性と民間伝承』岡書院 (新 384. 6 YAN) 書入なし
31. 信濃教育會北安曇部會編 1933 『北安曇郡郷土誌稿 5 民謡童言葉篇』郷土研究社 (新 382 SHI)
表紙に新村筆「昭和九年七月十四日 柳田氏より贈らる 新村出」扉に新村筆「砧村におとづれしとき
柳田氏の書齋にありし一冊をもらい受けてそのあたりの新開住宅地より櫟林竹林のある農家の旧村落を
とほりて葎しげるあたりに行又子のさかんに鳴くをきき門口に柵一本立てる深大村といふをすぎて鉄道
橋を渡りて、増田氏をたづね、再び柳氏と共に渋谷道玄坂にて袂を分ちぬ 昭和九年七月十四日涼し
き曇り日の午後より夕べ夜記」昭和九年七月十六日しるす 京にかへりて 新村出
32. 柳田国男 1933. 01 『地名の話その他』岡書院 (新 291. 034 YAN)
表紙に新村筆「昭和八年一月廿八日受領 新村出」, 扉に新村筆「昭和八年一月二十八日二十九日一読
了 出」他に書入なし
33. 柳田国男 1933. 01 『農村語彙 其の 1』『農業経済研究』9/1 (抜刷) (新 818 YAN)
表紙「昭和八年四月十四日砧村の著者をたづねて此の第一及第二の抜ずりを得たり 東京僑居にて 新
村出」, 傍点線等なし
34. 柳田国男 1933. 04 『農村語彙 其の 2』『農業経済研究』9/2 (抜刷) (新 818 YAN)
表紙「昭和八年四月十四日受領す 新村出」, 朱ペンの誤字誤植訂正多数。刊行者によるものか?
35. 柳田国男 1933. 04 『小さき者の声』玉川学園出版部 (新 384. 5 YAN)
扉に新村筆「昭和八年八月七日 新村出」。他に書入なし
36. 椎橋好 1933. 06 『下野民謡採集』郷土採集れだくてえよ (388. 9 SHI)
扉に新村筆「昭和八年十月一日砧村に柳田氏を訪ひてかへりがけに受領す 新村出」「けふ下野をすぎ
て 仙台に入り其の夜 客舎のすさびによむ 十月三日」, 他に書入なし
37. 柳田国男 1934. 01 『児童語彙 1』『子供の詩研究』4/1 (抜刷) (新 814. 8 YAN) 書入なし
38. 柳田国男 1934. 01 『餅と臼と搗鉢』『社会経済史学』3/9 (抜刷) (新 383. 8 YAN)
誤字訂正の朱筆あり
39. 柳田国男 1934. 03 『児童語彙 2』『子供の詩研究』4/3 (抜刷) (新 814. 8 YAN) 書入なし
「児童語彙 3」と合冊
40. 柳田国男 1934. 04 『児童語彙 3』『子供の詩研究』4/4 (抜刷) (新 814. 8 YAN) 書入なし
「児童語彙 2」と合冊
41. 柳田国男 1934. 04 『農村語彙 トーナ』『農業経済研究』10/2 (抜刷) (新 818 YAN) 書入なし
42. 国語学講習会編 1934. 04 『国語学講習録』岡書院 (新村出, 柳田国男, 小倉進平, 金田一京助) (重
801. 4)
二冊所蔵, いずれも書入あり
一冊目: 表紙に新村筆「第六と第七と ○新」, 扉に新村筆「新村出」, P 49 「規範的対歴史的日本文典
新村出」が加筆修正され「第六 日本文典の兩種 (規範的文典と歴史的的文典)」となっている, 他に書
入なし, 新村 1941. 02 『国語問題正義』白水社に「規範的対歴史的日本文典」が第六章「日本文典の両

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

種」として再録されているので、その底本として用いたものか？

二冊目：表紙に新村筆「昭和九（八）年（一九三四（三））夏季 新村出 訂正卒 日本文典（規範的
対歴史的） 日本辞書の現実と理想 以上二■■■」，扉に新村筆「昭和九年三月二十六日受領及訂正 新
村出」，誤字訂正多数，P 179（後記）に某点線

43. 金田一京助 1934. 05『北の人』梓書房（新 914. 6 KIN）

金田一筆「謹呈 新村出先生 著者」，新村筆「きのふあさ大学に出がけに之を承りし 大学にて柳田
氏にあひ此の本の題簽の話などで、けふ東上の途中、殆ど全部を読了し感興極りなし、著者に再び書状
をかくにて後しす 昭和九年五月二十三日夜 一ツ橋の寓居にて 新村出」，他に書入なし。

44. 柳田国男 1934. 06『一目小僧その他』小山書店（新 380. 4 YAN）書入なし

45. 柳田国男 1934. 08『民間伝承論』共立社（新 381 YAN）

他筆（鉛筆，赤鉛筆）による傍線等あり。表紙見返しに寄贈者（後藤興善）筆「新村先生 後藤興善」。

46. 柳田国男 1935. 01『岩波講座日本歴史 17 国史と民俗学』岩波書店（新 210. 08 IWA）

新村以外の筆と思われる傍点線およびメモあり。封書宛名書添付。

47. 柳田国男 1935. 07『遠野物語 増補版』郷土研究社（新 388. 1 YAN）

巻頭地図頁左上端に新村朱筆「○盛岡よりハはるか東南に遠野ハ在リ 出」，他に書入なし

48. 柳田国男 1935. 08『郷土生活の研究法』刀江書院（新 380. 7 YAN）書入なし

49. 柳田国男 1935. 10『産育習俗語彙』恩賜財団愛育会（重 385. 2）

見返しに語彙についてのメモ多数。扉に新村筆「『旅と伝説』（第六年七月）「誕生と葬礼号」（東京三元
社刊）昭和八年七月一日刊（巻頭論文）第七節「生と死と食物」P1. -P. 13を参照すべきこと」新村朱
筆「著者郵贈 昭和十年十月 新村出」，目次の「二二、餅踏」の下に新村朱筆「誕生祝」

50. 柳田国男編 1935. 12『日本民俗学研究』岩波書店（新 389. 1 YAN）

同書所収「座談会記事」の中の語彙に対する朱筆，赤・青・黒鉛筆の注記あり。

51. 柳田国男 1935. 12『風位考資料』國學院大學方言研究会（重 818）書入なし

新村出 1951「風の名」『語源をさぐる』（新全 4：257）に言及あり

52. 柳田国男 1936. 01『地名の研究』古今書院（重 291. 034）

表紙見返しに柳田筆「新村大人御文庫 昭和十一年一月十六日 柳田国男上」，裏表紙見返しに宛名書
貼込，他に書入なし

53. 柳田国男編 1936. 03『山村生活調査 第二回報告書』守隋一（新 384. 1 YAN）書入なし

54. 柳田国男・関敬吾 1936. 08『昔話採集手帖』民間伝承の会（新 388. 1 YAN）書入なし

55. 木曾教育会 1936. 09『木曾民謡集』信濃毎日新聞（新 388 SHI）

扉に新村筆「昭和十二年二月二十七日 砧村の柳田氏を訪ひしをりにおくられたり 新村出」，傍点線
若干，

56. 柳田国男 1936. 12『国語史 新語篇』刀江書院（重 810. 2）書入なし

57. 柳田国男編 1937. 06『山村生活の研究』民間伝承の会（新 384. 1 YAN）書入なし

58. 柳田国男 1937. 07「玉依彦の問題」伊波先生記念論文集編集委員（代表・島袋全發）『南島論叢』沖縄
日報社（新 291 IBA）書入なし

59. 柳田国男 1937. 09『葬送習俗語彙』民間伝承の会（新 818 YAN）書入なし

60. 柳田国男 1938. 04『禁忌習俗語彙』国学院大学方言研究会（新 818 YAN）書入なし

- 61-a. 柳田国男 1938. 05『服装習俗語彙』民間伝承の会（新 818 YAN）書入なし。

- 61-b. 柳田国男 1938. 05『服装習俗語彙』民間伝承の会（重 383. 1）

表紙に新村筆「新村出」，表紙見返しに印「新村重山文庫」，そのほか「綿」という語彙への注記多数

62. 柳田国男 1938. 05『木綿以前の事』創元選書（重 380. 1）
扉に新村筆「昭和十四年六月二十四日よりよみはじめる 新村出」。他に書入なし
63. 柳田国男 1939. 09『国語の将来』創元選書（重 810. 1）
扉「昭和十四年九月二十六日東北の旅よりのかるさ 東京神田にて求め翌日京都へ戻る途中よむ 新村出」。他に書入なし
64. 柳田国男 1939. 12『孤猿随筆』創元選書（重 380. 1）
表紙見返しに新村筆「昭和十四年十二月受領 著者寄贈 新村出」，他に書入なし，宛名書を挟込。
65. 柳田国男 1940. 02「方言の成立」安藤教授還暦記念会編『安藤教授還暦祝賀記念論文集』三省堂（新 810. 4 AND）書入なし
66. 岩倉市郎 1940. 02『おきえらぶ昔話』民間伝承の会（新 388 IWA）
扉に新村筆「昭和十五年三月十二日 柳田氏寄贈 新村出」他に書入なし
67. 柳田国男 1940. 04『食物と心臓』創元選書（重 383. 8）書入なし
68. 柳田国男 1940. 05『民謡覚書』創元選書（重 388. 9）書入なし
69. 柳田国男 1940. 08『妹の力』創元選書（重 380. 1）
表紙見返しに宛名書貼り込み。書入なし
70. 柳田国男 1940. 11『野草雑記』甲島書林（重 380. 4）
『野草雑記』と共有する帙に新村筆「昭和十五年十二月廿三日 ○新」，扉に新村筆「昭和十五年十二月二十三日 新村出」，他に書入なし
71. 柳田国男 1940. 11『野鳥雑記』甲島書林（重 380. 4）
『野草雑記』と共有する帙に新村筆「昭和十五年十二月廿三日 ○新」，扉に新村筆「昭和十五年十二月二十三日 新村出」，他に書入なし
72. 柳田国男 1941. 01『豆の葉と太陽』創元選書（重 380. 1）
扉に新村筆「一ツ橋の客舎にて 新村出 昭和十六年紀元節の午後著者を尋ねし折 内室の手かみありし一冊を取寄せて贈らる 白梅 二もと寒紅梅ほゝゑミ木犀月桂樹みどり濃き早春なりけり」。他に書入なし
73. 柳田国男編・岩倉市郎著 1941. 08『全国方言集 喜界島方言集』中央公論社（新 818 ZEN）
扉に新村筆「昭和十六年九月八日接手」，扉に書簡（昭和 16 年 9 月 6 日付の断簡）貼込，柳田筆「新村大人御次 柳田国男」「喜界島方言集送らせ候も御入手被下候や 是ハあまたの古語の埋もれ居るよき遺物層のやう存候 恐々頓首 九月六日」，他に書入なし。
74. 柳田国男 1941. 12『石神問答』創元社（日本文化名著選書）（重 387）
扉に新村筆「昭和十七年一月十四日 新村出」。他に書入なし
75. 柳田国男 1942. 02『こども風土記』朝日新聞社（重 384. 5）
奥付に新村朱筆「昨夜東京よりの友春雨を冒して来り此の本を河原町の朝日ビルにてみかけりといひしをきゝけさ深草までゆくをり立寄りて之を求め藤ノ森までの電車の中にてよみはじめぬ 昭和十七年三月三十日 春風暖けき日なり 重山老史」。他に書入なし
76. 柳田国男 1942. 04「日本民俗学」国民学術協会『学術の日本』中央公論社（新 041 KOK）書入なし
77. 柳田国男編・野村伝四著 1942. 04『全国方言集 大隈肝属郡方言集』中央公論社（新 818 ZEN）
野村伝四の封書宛名書挟込。書入なし
78. 柳田国男編 1942. 07『増補風位考資料』明世堂（重 818）書入なし
79. 柳田国男 1942. 05『方言覚書』創元選書（重 818）書入なし
80. 柳田国男 1942. 10『木思石語』三元社（新 388 YAN）

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

扉に新村筆「昭和十八年六月二十四日 東京よりのかへりぢによむ 重山老史」。柳田のハガキ貼込（昭和18年6月24日以降）。他に書入なし

81. 柳田国男 1942.11『山島民譚集』創元社（日本文化名著選）（新388.1 YAN）書入なし

82. 柳田国男 1942.11『小さき者の声』三国書房（新384.5 YAN）

扉「昭和十七年十二月廿三日受領 著者より寄贈 新村出」，他に書入なし，表紙見返しに封書宛名書を貼込。

83. 柳田国男 1943.10『神道と民俗学』〔改訂版〕明世堂（新381 YAN）序文に傍点等

84. 柳田国男監修・岩倉市郎著 1943.12『南蒲原郡昔話集』三省堂（新388 IWA）書入なし

85. 柳田国男編 1944.06『黒百合姫物語』言霊書房（重383.1）書入なし

86. 柳田国男 1944.07「序」日本放送協会『日本民謡大観 関東編』日本放送出版協会（新388 NIP）書入なし

87. 柳田国男 1944.08『火の昔』実業之日本社（重382）

表紙見返しに新村筆「昭和十九年十一月四日夕ぐれ 烏丸鞍馬口の清水書房にて求めつ この日東山の坂内氏邸に訪書の砌 案内の今井正雄氏の示されしをみてなり 重山寒人 燈火すでに親しむべき時にして火鉢ハ未だ出されず たそがれに近く志ぐれ日和なれども電燈をなほ点せず 老眼を嘆じ 老寒を耐ふ 十一月五日 出」。他に書入なし

88. 柳田国男 1946.04『先祖の話』筑摩書房（重380.4）書入なし

89. 柳田国男 1946.04『笑の本願』養徳社（新141.6 YAN）

表紙に新村筆「出」，扉に新村筆「昭和二十一年（一九四六）四月十四日あさ受領し おもしろさうなところを選びよみゆきつ ㊤」「かくて十五年十月末，一昨日清水寺の貫首上人（大西良慶上人）が瑞峯院における真溪法首翁の追善講話に「爆笑ハ法首の念仏」とありしをおもしろう聴聞しけるが，ものわらい，このニガワラヒと微苦笑には言及せられざりき。すでに故人なる久米正雄（昭和二十七年逝）君は「微苦笑芸術」といへる小著ありしが，予未見。昭和【三十】六年十月【三十】一夜更けにしるしぬ。重山識 ㊤」，目次，P186-187に新村筆の注記，巻末に別紙メモの添付あり。封書宛名書添付。その裏面に新村筆のメモ。他に書入なし

90. 柳田国男 1946.07『毎日の言葉』創元社（新812 YAN）

表紙に新村筆「昭和二十一年七月受 出」，扉に新村筆「昭和二十一年七月十五日接手 著者寄贈」，扉の次項に新村筆「（昭和十七年夏秋の■より）愛孫日記，十七年九月廿九日条 婦人公論に連載せられしを，上り下りのツバメ，カモメなどの展望車の書架上よりとりだして安らかによみあぢはいしことありけり。著者に語りて，一冊にまとめて出版せられなば御寄贈を受け（た）しといひしことありければ，忘れて郵送あり（しがわが手に届き）けるは，をとつひ，著者の榮任をよろこびて一首をおくりし二日の後なり 七月十五日 小山居老史 文字のみち 言葉のみちの 大本も 君に委ねば 心安けむ 七月十六日エハガキにて礼状を出し候はしにかきつけたるうた ひゞひゞの よのつねの ことばの道も わけいれば 奥がは深し 花も咲きけり」。傍点線等多数。

新村出 1956「やまと言葉」（新全3：343）に言及あり

91. 柳田国男 1947.01『口承文芸史考』中央公論社（新388.1 YAN）書入なし

92. 柳田国男 1947.05『分類農村語彙 増補版 上』東洋堂（新818 YAN）

表紙に新村筆「増補版 但シ（本）」，他に書入なし。

93. 柳田国男 1947.08『俳諧評釈』民友社（新911.309 YAN）

扉に新村筆「昭和二十二年十二月三十日 雪ふりしあくるに 新村出」。他に書入なし。西尾鉦次郎よりの年賀状挟込。

- 新村出 1948「土岐翁回顧」（新全 14：514）に言及あり
94. 柳田国男編 1947. 12『沖縄文化叢説』中央公論社（新 382. 1 YAN）
扉に新村筆「昭和二十三年 一九四八 三月 新村出」，奥付頁に寄贈者（島袋源七）筆「大田区雲ヶ谷六六〇 島袋源七」。他に書入なし。
95. 柳田国男 1948. 06『西は何方』甲文社（新 810. 4 YAN）
扉に新村筆「昭和二十三年七月十八日購入 新村出」，他に書入なし
96. 柳田国男 1948. 11『柳田国男著作集 北国紀行』実業之日本社（新 380. 8 YAN）
扉「昭和二十四年三月二十一日春分の日のあさ受領す 新村出」，傍点線等多数
97. 柳田国男 1949. 02『母の手毬歌』芝書店（新 380. 4 YAN）
巻末に新村筆「わが母の手毬のうたは きかざりし 事につけては いもとらおもはん 昭和二十七年十一月十六日 柳翁おくる 出」。他に書入なし
98. 柳田国男 1949. 02『母の手毬歌』芝書店（重 914. 6）
表紙見返しに新村筆「著者寄贈本」，扉に新村筆「昭和二十六年十二月十九日到来 著者寄贈 新村出」，裏表紙見返しに宛名書挟込，他に書入なし。
99. 柳田国男編 1949. 04『海村生活の研究』日本民俗学会（新 384. 1 YAN）
若干の鉛筆・赤鉛筆書傍点線あり，他筆か。
100. 柳田国男 1951. 09『島の人生』創元社（新 389 YAN）
扉に新村筆「辛うじて 七つの小島 保ちして 大八州国 何となのらむ と写して次に 柳翁への謝状にかきつけおくる 昭和二十六年一月十六日柳翁郵贈 出」，目次「島の三大旅行家」の下に新村筆「日野夏雲，田代安定，笹森儀助」，他に書入なし
101. 柳田国男監修 1951. 01『民俗学辞典』東京堂書店（重 380. 3）
表紙見返しに「民俗」についてのメモあり，扉に新村筆「昭和二十六年二月 新村出」。傍点線等若干。
新村出 1950『「民俗学辞典」を推称することば』（新全 9：211），および，全集が初出の『語源をさぐる 2』（新全 4：373）に言及あり。
102. 柳田国男著・柳田国男先生喜寿記念会編 1951. 10『後狩詞記 附柳田国男先生年譜・著作目録』実業之日本社（新 388. 1 YAN）
表紙見返しに付箋「謹呈 柳田国男先生喜寿記念会」，扉に新村筆「昭和二十六年十月二十日受 新村出 かくて十月二十五日柳翁のおとづれにあひて相語ること多時，懐旧の情つきず，喜寿をことほぎ受勲を慶び，二十七日二十八日その余韻なほつゞく」，巻頭写真頁に柳田筆「此写真の上ニ五十五年前の亡くなった父の歌あり 日く 生ひ出つる 若草見れハ ふるさとの 荒れし堰櫃の 物おもひも無し 右 昭和二十六年十月二十五日記念 柳田国男」，「柳田国男先生年譜」に傍点線等多数。P 74（明治二十五年）「松浦萩坪翁」に傍線を付し「「萩の古枝」（歌集）香川景樹門」，P 74（明治三十年）に「この年九月東大（法）入学」，P 80（大正元年）に「内閣書記官（兼任）として内閣文庫を管す」，P 82（大正十年）に「夏 ロンドンにて B. M. の RM にてなど」「マルセイユよりクライスト号にて同船帰朝」，P 88（昭和八年）の「松本で国語の講習会」に新村筆「同講」，P 89（昭和八年）の「京都で「そやさかいに」講演」に新村筆「方言学会」，P 96（昭和二十五年五月）に「二十九日奈良ニテ同講，発句（鶏），同宿」，P 96（昭和二十五年十月）に「三十日 予を訪れんとして風邪臥床を以て止む」，P 96（昭和二十六年），「十月十三，四日 喜寿祝賀会 十月二十四日，大阪より入洛 二十五日，小山居に訪ひ午後京大（泉井），参照 改造社版（昭和六年）現代日本文学全集 第五十八（新柳吉斎随筆選）附録年譜」
103. 柳田国男 1953. 06『不幸なる芸術』筑摩書房（新 914. 6 YAN）

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

扉に新村筆「昭和二十八年六月二十一日 梅雨霽れし日曜日の正午受 さゝゆりの 香こもる 小山居の 東斎裡に 莫迦凡人」，目次の「馬鹿考異説」の下に新村筆「拙考の批判あり」。傍点線等若干。

104. にひなめ研究会 1953. 11『新嘗の研究』創元社（重 384. 31）

表紙見返しに新村筆「昭和二十八年十二月五日受 柳田国男翁郵贈 新村出」，宛名書挟込。

105. 柳田国男編 1954. 09『明治文化史 13 風俗編』洋々社（新 210 KAI）書入なし

106. 柳田国男 1959. 11『故郷七十年』のじぎく文庫（新 914. 6 YAN）

表紙見返しに「毎日新聞記者 藤原剛」の名刺貼込，その名刺に新村筆「37. 8. 8 午後 2 - 3 柳田君の訃音について」，扉に新村筆「昭和三十四年己亥十二月十一日夕受」および柳田筆「重山先生請評 昭和三十四年十二月 柳田」があり，本文に傍点等若干，巻末所収年譜に鉛筆書多数，巻末に宛名書貼込，

107. 柳田国男 1962. 01 - 1971. 06『定本柳田国男集』筑摩書房（全 36 巻）（重 380. 8）

傍点線等多数。

資料②：柳田国男旧蔵新村出図書一覧

*これは成城大学民俗学研究所・柳田文庫に収められている柳田国男旧蔵書のうちの新村出著作（監修、校訂、編著、分担執筆、抜刷等を含む）の一覧である。

*著者名、刊行年、著作名、発行者（雑誌抜刷等の場合は誌名および巻号）、分類番号、特記事項（書込、貼込、挟込等）の順で表記した。

*書込内容は署名、日時、文章のみ採録し、傍点線、単語等は概要の提示にとどめた。

*注記は [] で記した。

1. 新村出校 1911.06『文禄旧訳伊曾保物語』開成館（Y-T-5-ハ-21）
2. 京都帝国大学 1923.06『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第7冊』京都帝国大学（新村出「摂津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」および新村出・浜田耕作「京都及其附近発見の切支丹墓碑」所収）（Y-H-5-ハ-22）
3. 新村出 1924.12『南蛮更紗』改造社（Y-C-6-ロ-25）
表紙見返しに新村筆「謹呈 柳田学兄 著者」，P118-119に付箋（同項「盛んに転化してゐる葡萄牙語や西班牙語」「印度や支那方面から伝へられた織物類」に柳田傍点），P166-167に栞（陶陶亭銀座支店の名刺）。
4. 新村出 1925.02「元治元年に於る幕吏の上海視察記」『商業と経済』5/2抜刷（長崎高等商業学校研究館年報）
5. 新村出 1925.09『南蛮廣記』岩波書店（Y-C-6-ロ-23）
「謹呈」の付箋。
6. 新村出 1925.09『典籍叢談』岡書院（Y-C-6-ロ-21）
7. 新村出 1925.10「八幡船考」『経済論叢』大正14年10月号抜刷（Y-J-4-ハ-17）
8. 新村出 1925.11『南蛮廣記 続』岩波書店（Y-C-6-ロ-24）
9. 新村出 1927.11『船舶史考』（増訂再版）更生閣（Y-T-1-ニ-17）
10. 新村出 1927.12『東方言語史叢考』岩波書店（Y-T-1-ハ-17）
「著者謹呈」の付箋。書入多数だが概ね誤字に関するもの。
11. 新村出監修 1928.01-11『海表叢書』更生閣書店（Y-C-2-ニ-4-8）
12. 新村出 1928.02「「邸」の字音と「問」の語源」『狩野教授還暦記念支那学論叢』抜刷
*柳田全集（28：398）に言及アリ
13. 新村出編 1928.07『昭和三年七月七日 於京都大学楽友会館 伊曾保物語展観目録』ぐろりあ・そさえて（Y-K-1-ニ-41）
14. 新村出 1928.12『異国情趣集』（巻2-6）更生閣書店（Y-C-2-ニ-2）
15. 新村出 1929.10「国語に於けるFE両音の過渡期」大塚史学会編『三宅博士古希祝賀記念論文集』岡書院（Y-K-4-ニ-5）
16. 新村出 1929.11『薩道先生景仰録』ぐろりあ・そさえて（Y-G-5-ハ-44）
「贈呈」の付箋。
17. 新村出 1930.05『琅玕記』改造社（Y-C-6-イ-23）
奥付前項に柳田筆「昭和五年八月八日了 柳田国男」。
18. 新村出 1930.08『南国巡礼』梓書房（Y-D-6-ハ-21）
19. 新村出 1930.11『東亜語源志』岡書院（Y-T-1-ハ-18）

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

- P 94-95 に付箋, 11 行目「玉勝間」に朱点, P 127-128 に付箋, 6 行目の頭, 7 行目「チヂミフグリ」, 12 行目の頭に朱点, P 362-363 に付箋, P 366-367 に付箋。
20. 新村出訳 Croiset, Alfred 著 1930. 11 「希臘学」 日仏会館編・発行『仏蘭西科学 下』（Y-C-5-ロー 27）
21. 新村出 1933. 04 『岩波講座日本文学 言語学概論』岩波書店（Y-E-6-イ-149）
22. 新村出 1934. 03 『典籍散語』書物展望社（Y-C-6-ロー 22）
23. 国語学講習会編 1934. 04 『国語学講習録』岡書院（新村出「規範的対歴史的日本文典」および「日本辞書の現実と理想」所収）（Y-T-1-イ-26）
- 柳田国男「国語史論」巻頭に柳田筆「此文記述不完全又二三の誤アリ シカシ「国語の将来」の中ニ殊ニ「方言の成立」の一章ノ内説きたること多ければ今は之を書き改めず たゞ保存し置候 柳田」。P 80（新村「規範的対歴史的日本文典」の「第八 文法の項目」）行頭に○, 点, 「第二に造語論」に傍線。P 102（新村「日本辞書の現実と理想」の「第二 語の選択」）「詩や文章の創作者や社会へ薦めて」「口語を富ませる」に傍線, 行頭に二重マル。奥付前に柳田筆「十一年後ニ一読シヲハル 昭和十九年十一月二十一日 柳田国男」
24. 新村出 1935. 02 『岩波講座日本歴史 南蛮文学』岩波書店（Y-E-6-イ-107）
26. 新村出 1935. 03 『国語系統論』明治書院（国語科学講座）
- P 24-25（「ウラル・アルタイ語族との関係について」の節）に B 5 葉半紙挟み込み。末尾に柳田筆「昭和十年四月二十日了 柳田国男」
27. 新村出 1937. 09 『国語運動と国語教育』岩波書店（岩波講座国語教育）（Y-E-6-イ-142）
28. 新村出翻字 1939. 03 『天草本伊曾保物語』岩波文庫（Y-B-0-ニー 29）
- 書入多数なるも「読了」の記載なし。
29. 新村出 1940. 11 「杉原紙源流考 上」『和紙研究』7（Y-J-4-ハ-17）
- 表紙に新村筆「柳田学兄叱正 昭和十五年十二月 新村出 杉原紙源流考 上（和紙研究第七号抜刷）昭和十五年十一月刊」, P 15 に新村筆「昭和十五年八月末稿」。
30. 佐々木信綱・新村出共編 1940. 11 『万葉図録』靖文社（Y-J-5-ハ-23）
31. 新村出 1940. 11 『日本の言葉』創元選書（Y-T-0-ハ-14）
32. 新村出 1941. 02 『国語問題正義』白水社（Y-T-1-ロー 2）
- 書入多数, P 14 に「謹呈」の付箋の挟込, P 288（本文末尾）に柳田筆「此年三月——日了 まう一度よまうと思ふ 柳田国男」。
33. 新村出 1941. 05 『日本吉利支丹文化史』地人書館（Y-D-5-ハ-5）
34. 新村出 1941. 11 「語彙の変遷」『国語文化講座 2 国語概論篇』朝日新聞社（Y-T-0-イ-13）
35. 新村出校閲・竹内若校訂 1943. 12 『毛吹草』岩波文庫（Y 2-172-KE 14）
36. 新村出 1944. 06 『新村出選集 第三巻 典籍篇・史談篇』養徳社（Y-T-0-ハ-17）
- 同書添付『新村出選集附録』第 2 号所収の新村出「天理の出典」の一部（P 5 下段末）に切り抜かれた跡。
37. 新村出 1947. 12 『新村出選集 第四巻 語志篇乾』養徳社（Y-T-0-ハ-18）
- P 66-67 に『国語学会会報』第 7 号（1947. 11）, P 70-71 に第 9 号（1948. 02）, P 260-261 に第 3 号（1946. 11）の挟込。P 284-285 に岩波書店「文学」編集部・橋本順行の柳田国男宛ハガキを挟込。表「世田谷区成城三七七 柳田国男様 東京千代田区神田一ツ橋二ノ三 岩波書店「文学」編集部 一二月八日 橋本順行」, 裏「過日は御丁寧なお便りいただきましてありがとうございます。その説おしらせいただきまし「飯尾常房考」のことにつきまして「文学」三月号まで編輯を終りました関係で、この

人 文 学 報

次の編輯会が今月末ちかくなりますので随分おそくなり申しわけありませんが、出来ますれば いちど お見せいただきたく存じますが、如何でしょうか。たいへん御返事がおくれ申しわけありませんが、何卒よろしくお願い申し上げます」

38. 金星堂編 1948.11『現代随筆選集 1』金星堂（新村出「時間を測る器」および「亜刺比亞馬と波斯馬」所収）（Y-C-6-ロ-17）
39. 新村出 1951.03『語源をさぐる 1』岡書院（Y-T-0-ロ-16）
* 書入多数だが大半は記号（点，○×？，傍線）と誤字の訂正。P 266（奥付前頁）に柳田朱筆「昭和二十六年四月二十日了 柳田国男 二三異見アリ 後日話題トスヘシ コノ書誤字多シ 筆記者人ヲ得ストイフヘシ」。
40. 新村出 1956.01『言葉の今昔』河出書房（河出新書）（Y 2-163-SH 64）
P 76 に栞。そこまで書入多数。
41. 新村出 1956.07「よいことば・悪いことば，ことばのただしさ」『ことばの講座 2 これからの日本語』東京創元社（Y 2-160.01-KO 94-2）

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあぢはいしことありけり（菊地）

要 旨

国民的辞書『広辞苑』の編者として名高い新村出が日本民俗学の創始者・柳田国男と終生親交を結び続けたことの学史的意義は、これまで、ほとんど検討されることがなかった。筆者は、大阪市立大学学術情報総合センター・新村文庫、新村出記念財団・重山文庫、成城大学民俗学研究所・柳田文庫に所蔵される二人の著作に記された書入の分析から、二人の学問的交流をトレースした。その結果、二人が長期間にわたって意見交換や資料交換を行い、互いの学問を深く信頼・尊重しあっていたことが確認された。また、二人の交流は、柳田民俗学と京都大学の文化史学派を結びつけた接点としても重要な役割を果たしていた。このように、新村出旧蔵書の膨大な書込は、近代日本の人文科学を捉え直すための、きわめてユニークな資料である。

キーワード：新村出，柳田国男，民俗学，京大文化史学派

Summary

Izuru Shinmura, a famous linguist as the editor of the Japanese-language dictionary *Kojien* and Kunio Yanagita, well-known as the founder of the Japanese folklore studies, enjoyed their lifelong friendship, of which the implication had rarely been considered. This paper studies their relationship through the analysis of Shinmura's handwritten notes on Yanagita's books in the Shinmura's personal library now located both in the Osaka City University Media Centre and the Shinmura Izuru Memorial Foundation. These notes show their frequent exchanges of comments and books, which tells us their deep confidence. Moreover, their friendship provided some important opportunities for the collaboration of Yanagita's folklore school and the cultural history school of Kyoto Imperial University.